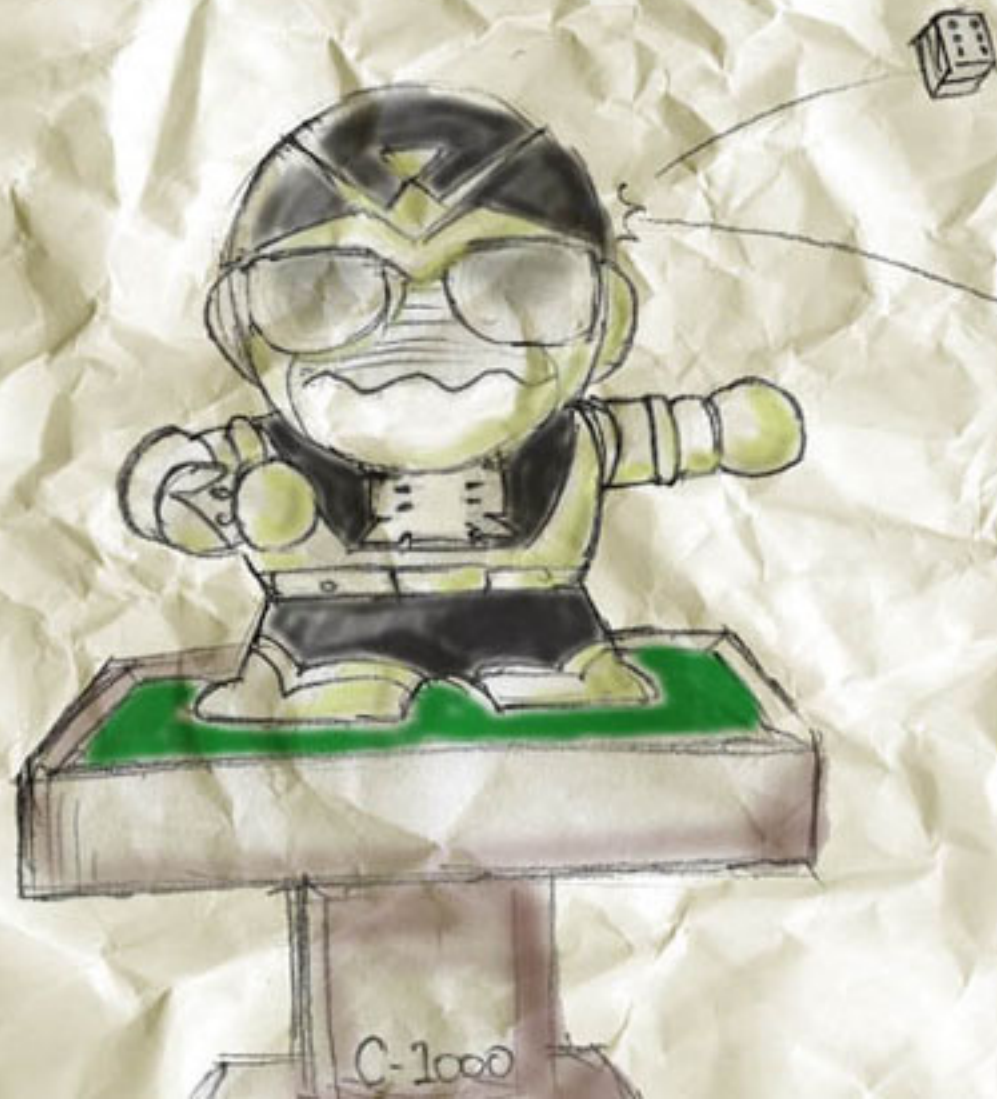


仮題エースマンとは何だ？

原作・平井和正
構成・平井和正
脚本・平井和正
解説・平井和正
余談・平井和正



クレジット・タイトルをどうぞ。

原作・平井和正

構成・平井和正

脚本・平井和正

解説・平井和正

余談・平井和正

オープニングタイトル

で、その夜。エースマンは、渋谷百軒店の雀荘西風荘を舞台に、麻雀プロ三名を相手に闘い、一荘でプラ百八十の大トップを占めたのだ。

レートはピンピンであるから、実に十八万がとこ、ガツポリと懐中に収めたわけである。

「どうも。面白く遊ばせて貰いました。では、私はこれで」

顔色を失い寂として声もない麻雀プロたちに軽く頭をさげ、エースマンはともすれば転げ落ちそうな急角度の狭い階段を（出前配達がいっつも転落する）とんとん、と降りると、爽快な夜風に顔をなぶらせ、意気揚々と歩きだした。

と、そのとき。

「待て、このイカサマ野郎！」

罵声とともにばらばらと後を追ってきた三人の男たち。

「やあ、これは。何か忘れ物でもしましたか？」

軽く眉をつりあげ、白い歯を覗かせるエースマン。相手の三人は今更いうようなことではないが、さきほどのボロ負けの麻雀プロたちである。

「待ちな、にいさん。ちよと顔を貸して貰おうぜ」

男たちは威嚇的にエースマンを取り囲み、薄暗くひと気のない、工事現場に連れ込んだ。

「この野郎。どうも変だと思ったら、てめえサマ師だな」

余談であるが、サマ師とは麻雀渡世の男たちの隠語で、イカサマ師をさす。彼らの生態は、作家阿佐田哲也氏の一連の麻雀小説に詳述されているので、お読みになればよるしい。

「ケツの青い若造のくせしやがって、とんでもねえ野郎だ。手足をおっぺしょってやるからそう思え」

「こら小僧。俺たちは麻雀道一筋、二十年も飯を食ってるんだい。てめえみたいな昨日明日今日の駆け出しに、イカサマやられちゃっちゃあ、俺たちの名が廃るんだい」

「金を返して素直に謝ればよし、さもなきやあ二度と牌をにぎれないようにしてやる」

口々に欠伸の出そうな冴えない凄文句を吐く。

「笑わせちゃあいけません。サマ師とはそちらさんのことでしょう。こちらはただ「ドラ爆積み返し」、「カウンター元禄積み」、「逆・小便天和」、「応じ返し・総取り換え」で対抗させて貰っただけのこと。あの雀荘にいた人たちはマスターから給仕の小娘、客にいたるまで全員、あんたらサ

マ師の仲間だったんだ。それにサマ師がイカサマの返り討ちにあい、文句をつけるなんて、それこそ恥の上塗りじゃねえですかい」

「や、やかましいやい」

「なめやがつて」

「生かしちゃおかねえぞ」

手に手にギラツと光るものを引っこ抜いて、突っかかる。と、エースマンの姿がその場から水煙が消えるように消失した。身動きしたとも見えないのに、次の瞬間、虚空の裂け目に飲み込まれたと見えた。

「あつ。野郎、どこに消えやがつたつ」

うるたえて麻雀ゴロたちが右往左往する。

(笑声)

夜空に高々と響くのは哄笑で、いかにも相手を嘲弄している。愕然と振り仰ぐ、十メートルの高み、くみ上げた鉄骨の桁の上に立ち、古典的に高笑いする。

メタリックグレイを全身に吹き付け塗装したような、フアントム戦闘機の如く機能美をそなえた彼は、はたしてサイボーグかロボットか。

「おっ」

「ああっ」

「わっ」

口々に芸のない感嘆符を吐く麻雀ゴロたちだ。

「だれよ、おまえ？」

「人呼んでエースマンとは俺のこっつてい。ハイマンガンスチールのボディはちよつと古いが、体内に秘めた十萬キロワットの超小型原子炉は全然古くない。超小型電腦の威力によつて、超音速で疾駆し、重戦車もひっくり返す鋼鉄の男（だいぶ古い）スーパーロボットのエースマンだ。長すぎて覚えられないか？」

「やかましい、頓狂者が」

「やつちまおうぜ」

（銃声）

引き抜いた匕首を捨てて、（最初から使えばいいのに）拳銃を乱射するが、すべての弾丸は朦朧と霞むエースマンの影を甲斐なく射ち抜くのみだ。

「わあ、弾丸がきかねえ」

「バケモノの体を全部突き抜けちまう」

（高笑い。なんで高笑いするのだ？ とても無粋だと思ふのだがね）

「無駄なことだ。エースマンは弾丸よりも早く動けるのだ。悪人め、観念するがよい。エースマンは世に存在する悪という悪を許すことができないのだ。

（効果音。悪人の断末魔の悲鳴）

クレーム

どうもひどいものだ。この原稿を書きながら、筆者、おおいに恥じ入っております。

この作家、発狂したのではあるまいか、とお疑いの向き

もあるだろうから、一言弁解させてください。

正直にいます。この原稿を依頼された時、とても当惑しました。筆者は在学中からSF小説に手を染め、SF専門誌にポツリポツリと発表しているうちに、大部数の少年週刊誌からお呼びがかかり、ズルズルと原作者というライターになった、生粋のエンターテインメント作家であります。

告白しますが、高尚なる文学作品を志したことなど一度もありません。また、一片の関心も持たないというのが正直なところです。

したがって、この「中央評論」という、中央大学出版部から刊行されているやや厳めしい舞台で、何も書くことがないので。他に錚々たる方々がお書きになるそうであるし、いまここで即席の「文学作品」をでっちあげたところで、所詮は慣れぬ手つきの猿芝居、赤恥をかくのが目に見えております。

しかし、一寸の虫にもなんとやら、どうせ恥をかくのなら、ひとつかきっぷりのよさをご披露しましょう、と妙な開き直りをしてしまいました。実にもう浅はかなものであります。

さて、そこで恥のかきついでに、一世一代の怪作をお目につけようと思ひ立ち、まず小説という文芸のスタイルを破壊する作業を試みました。

妙なことに、いわゆるエンターテインメント（通俗的娯

楽小説）は、もつとも保守的な分野であって、経験的に手法の「定石」が定められております。

「文学作品」では大手を振って通用する、斬新、かつ革新的な実験は、まずこのエンターテインメント分野では許されません。

例を挙げれば、正義の味方のスーパーマンが、くよくよと懷疑したり、挫折したりしてはならないのです。

早い話、当節流行りの旅鳥「木枯らし紋次郎」の主人公は、あくまでも正義の味方であり、弱いもの苛めの強者を成敗するヒーローでなければならず、突如変心して、一般庶民に害をなす悪漢になってはならないのです。そんなことでは、だれも安心してエンターテインメント小説を楽しめなくなってしまう。読者たちを彼ら自身の味気ない退屈さから一時的にでも解放し、ストレスを発散させるのが、エンターテインメントの機能だからでしょう。

そんなわけで、一般的なエンターテインメント作家たちは、人一倍自由奔放な「文学作品」のスタイルに憧れを抱いているらしいのです。

らしい、というのは、筆者がSF作家であり、とんでもない飛躍した発想に慣れているため、スタイルだけの実験にはさほど興味を持たないせいかもしれませぬ。

SFはある意味で、日常離れた思考実験の文学であり、たとえば人間ではないが知能をそなえる生き物（電脳でもよい）を設定すると、人間の精神活動にはずいぶん馬鹿

げたところが発見できるものなのです。

こんなことを書いていては、エンターテインメント論になつてしまいますが、今回に限つて、エンターテインメントでもなく「文学作品」でもない怪作をものするのが筆者の意図であります。

話を戻します。筆者がなぜ恥じているかといえば、あまりにもワルノリがすぎると意識したからです。なにもこんなオープニングを選ぶ必要は毛頭なかつたのです。

筆が滑つたといいますが、ついには当代一ともてはやされ、年に数千万円の所得税を納める花形マンガ原作者のパロディみたいになつてしまいました。

筆者もまた、マンガ原作を手がけることにより、物書き生活に入った人間であります。その作品「エイトマン」がテレビマンガ化されて思いがけずに大ヒットし、テレビアニメーション・ブームの呼び水になりました。

どうやら筆者は、終生「エイトマン」の名と別れる切れ目ということができないようです。最初の印象とは恐ろしいもので、いかに筆者が小説に精進しても、読者は「ああ、あのエイトマンを書いたヤツね」ということになつてしまふのです。

テレビの威力はまことに絶大、懽然とせざるを得ないほど。

そこで開き直ります。「エイトマン」のパロディを書くことと決心します。かくて筆が滑り、冒頭のデタラメ放題に

なった次第であります。

当然、クレームがつくでしょう。いや、それ以前に自分でクレームをつけます。リテイクを命じることになります。リテイクとは、テレビ、映画の用語で、やり直しのことです。

えっ、もういいって？ ああ、いいんですか？ 助かりました。何も書くことないんで、本当に助かります。ああ、よかった。頭の固い人たち相手に何をどうやって書こうかと脂汗かいてましたから。

じゃ、帰っていいですね。帰ります。もう二度と来ませんから。さいならっ。

終

追記

とんでもないシロモノである。中央評論というのは、私が卒業したらしい大学の出版局から出ている月刊誌だった。当時の関係者は一人も存在しないと思うので、発言できるのだが、こんな堅苦しい雑誌に、私は一切かわりあいたくなかったのである。

「8マン」という作品は、挫折運を持っていて、なにか源義経みたいに栄光を浴びた瞬間に滅びに向かうという性格らしいのである。この文章を書いた時、何度目か忘れたが、「8マン」のリメイク話が持ち出されていた。何度でも持ち出されるが、決して実現はしない。それが挫折運というものなのだろう。

その挫折運について語ろうとしたのだと思うが、向こうから断ってきたので、これ幸いと逃げ出してしまったのである。

仮題エースマンとは何だ？

デジタル版

発行日 2000年8月25日

著者 平井和正

イラスト 長尾 太

デザイン ルナテック

発行 有限会社ルナテック

〒125 0041

東京都葛飾区東金町3 13 6

info@ebunko.ne.jp

<http://www.ebunko.ne.jp/>

(C) KAZUMASA HIRAI、FUTOSHI NAGAO、LUN
ATECH

本作品は著作権上の保護を受けています。本作品の一部あるいは全部について、無断で複製・複製・転載することは禁じられています。